

平成 29 年度「税に関する高校生の作文」 国税庁長官賞受賞

【題名】 税について考えたこと

【都道府県】 沖縄県

【学校名・学年】 沖縄県立陽明高等学校 三年

【氏名】 名嘉 真鈴

「伊平屋島の海はとても綺麗だね。ここが好きになった。また来たい。」

私の故郷を訪れた人たちは皆そう言って笑顔を浮かべ、私は誇らしく思うがこの海の美しさにも税が関わっているとは今まで知らなかった。

小中学校の行事の一つに海浜清掃がある。正直面倒だと思いつつやっていたが、拾ったごみを処分するための費用や輸送コストに加え、休憩のときに飲むキーパーの麦茶や軍手などもすべて環境税というもので賄われていると聞いた。

私の島では全国でも少ない特別な環境税があり、フェリーのチケット購入時に入域税として百円ずつ加算される。そこで納税されたお金は海浜清掃を含め島の環境美化活動のために使われる。このことをつい最近になって知り、億劫だった海浜清掃に対しての意識が変わったと同時に、税という存在を身近に感じた。また、環境税で島の活性化と観光客の笑顔の相互扶助が成り立つのだと税に対しての意識も変わった。

この相互扶助の成り立ちは環境税のみならず、その他の税にも関連する重要な要素だと思う。その中で大切にすべきことは、税を使う側の納税されたお金をどういった使途でどのように活用していくのか、それに見合った税率であるのかを納税者がきちんと把握し納得できることを考慮した上で、自分のお金と同様に適切にお金を扱う姿勢である。そして、それらを納税者に分かりやすい形で公開し、また納税者も税と積極的に向き合っていくことで初めて本当の意味での税の意義が見えてくるのではないだろうか。

税金はいわば私たちが身近な生活、または将来の生活を豊かにするために政府に託す投資であり、必要不可欠なものだと思う。

私はもうすぐ選挙権が付与される年齢だ。これからの社会を築くための一票の重みを理解しなければならない。環境税について知るまで税に対し関心すら持つことはなく、税と言えばせいぜい消費税しか思いつかず、何の目的でなにに使われているのかも知らないまま、払うことが義務だから払うという認識でしかなかった。救急車や教科書など、無償で私たちの暮らしに潤いを与えてくれるものも当たり前と感じていた。おそらく、私と同じような考えの若者が多いのが現状だろう。今、私たちは税を通して様々な教育制度に支えられ、恵まれた環境の中で学ぶことができている、心から日本人に生まれて良かったと実感できる。その私たちがこれでは未来の子供達はどうなってしまうだろう。次世代を担う私たちがまず税に興味を持ち、政治と向き合う責任を自覚することでまた一つの相互扶助が成り立つのだ。

この作文を書くにあたり、故郷のことから始まり様々な視点から税について考えることができた意味は大きい。税を知る、それがよりよい社会を実現するための一歩となるだろう。